



141号 2012.3

パソコン用ホームページ URL <http://www.kawaguchi-lib.jp/>

携帯電話用ホームページ URL <http://www.kawaguchi-lib.jp/opw1/IMD/IMDMAIN.CSP>

携帯用 QR コード



わたしの今年の一冊 2011

昨年お読みになった本の中で印象に残った一冊をあげていただく「わたしの今年の一冊」は今回で16回目となりました。たくさんのご応募をいただきましたが、紙面の関係で14点、掲載させていただきます。ご協力いただいたみなさん、ありがとうございました。

「おしまいのデート」瀬尾まいこ 集英社 2011年刊 913.6/セ

読んでいると自然に笑みがこぼれました。

特に高校生のエピソードは描写が軽快ですごく印象に残りました。温かい気持ちで終われるとても読みやすい作品です。オススメします。(30代 女性)

「永遠の0」百田尚樹 太田出版 2006年刊 913.6/ヒ

大勢の中で己を貫く意志の強さ、生きたかったのに生きられなかった命、託された命。今を生きる私達はその遺志を継がなくてはと思った一冊。東日本大震災の後だけに強く心に残りました。(30代 女性)

「アバター」山田悠介 角川書店 2009年刊 913.6/ヤ

「ケータイ」という身近なものを題材にした話で、頭の中でイメージしやすく、とてもスピーディに読める本です。

主人公の気持ちが伝わるので、本の世界にどっぷりつかっている感じがします。続きが気になって途中でやめることができず、手にしたその日に読み終えてしまいました。(10代 女性)

「県庁おもてなし課」有川浩 角川書店 2011年刊 913.6/ア

テンポのある文体で、スラスラ読み進められます。県庁という古い体質の中で悩み道を見つけていく主人公とアシスタントの恋の話もまたたのし。心の中を読んでいるような筆致がこきみよい一冊です。(50代 女性)

「たったひとりのワールドカップ」 一志治夫 幻冬舎 1998年刊 B783.4/イ

逆風をバネにして日本のサッカーにプロフェッショナルリズムを焼きつけたアスリート魂はスポーツ以外のどんな分野にも参考になるイチオシの一冊です。(50代 男性)

「終末のフール」伊坂幸太郎 集英社 2006年刊 913.6/イ

オムニバス形式の作品。それぞれの登場人物たちが、今、精一杯生きているところが、今の自分の心にひびいた。

この作品の世界には数年後終末がおとずれることになっているけれど、それでも生きている人達の姿がすてきだと思った。(20代 女性)

「みえない雲」ゲートルン・ハウセヴァング

小学館 2006年刊 B943.7/バ

福島原発事故がなければ、この本に出会えなかったかもしれません。

チェルノブイリの事故の後、すぐに書かれたこの作品は、日本のみならず各国の原発を保有する人々に、これからどのように人間が決断し生きるか、その姿を問いかけていると思います。翻訳者の“あとがき”も印象的でした。

(40代 女性)

「奇跡のリンゴ」

石川拓治 幻冬舎 2008年刊 625.2/イ

リンゴの完全無農薬栽培に凄絶な試行錯誤の末に成功した物語。行き詰まって死を決意して夜中にロープを持って山中にはいって行った時、一本の木から、大事なものは枝・葉ではなく“土”だと天啓を受ける。人が信念をもって仕事をするととはどういうことか、窮極の努力とはどうすることかということを示してくれる。(60代 女性)

「つなみ」森健

文藝春秋 2011年刊 369.3/ツ

子供達の生々しい震災体験に再感動しました。

これらの体験をのりこえ、元気に成長してほしいと思いました。一人でも多くの人々(小学生)に読んで欲しいです。

又、家族でいろいろ話し合うきっかけになったらいいなと思います。(60代 女性)

「ワイルズの闘病記」穂積良洋

文芸社 2011年刊 LS916/ホ

17歳の少年が白血病の再発となつてからの闘病記です。たった17歳なのに、医師の診断を冷静に、客観的に受け止められるなんて、りっぱでもあるけれど、とても悲しいです。どうして神様はこんなすばらしい少年を早々に天に召してしまうのか。

(50代 女性)

「森崎書店の日々」八木沢里志

小学館 2010年刊 B913.6/ヤ

普段、小説にはあまり縁のない私が、タイトルに惹かれて手に取った本である。

神保町という街、主人公を取り巻く人々、そして何よりちょっと変わり者だが人間味あふれる叔父の存在が、全編を暖かい雰囲気包んでいる。

一緒に収録されている続編

「桃子さんの帰還」もお薦めしたい。

(女性)

「約束の地」樋口明雄

光文社 2008年刊 913.6/ヒ

とにかく、読みはじめから止まらなくなった1冊でした。

物語は、人食い熊、大イノシシ、ハンター、父親と息子の関係といったものがからみあっている冒険小説で、読んでみると次はどういう展開かと期待をもって読みすすむことが快感でした。久し振りに何もかも忘れて読むことの楽しさを味わいました。(60代 男性)

「負けんとき」上・下巻 玉岡かおる

新潮社 2011年刊 913.6/タ

近代史、特に女性史も多く学ぶことができる比較的読みやすい長編小説。

主人公(華族)及び伴侶(米国人)が国籍、身分などの障害を乗り越えて、仕事、伝道、結婚に立ち向かう長い道程は、現代に生きる私達に多くの示唆、勇気を与えてくれる。

(60代 女性)

「伊藤Pのモヤモヤ仕事術」伊藤隆行

集英社 2011年刊 699.6/イ

「もやさま」のゆる～い感じはゆる～い人から産まれた!? 小難しい仕事術の本ではなく「ゆる～く生きる参考書」といったところでしょうか。

忙しなく働く人、慌しい毎日を送っている人にこそ、おすすめしたい1冊。(20代 男性)

紙面の関係で、お寄せいただいたご感想のすべては掲載できませんでした。
書名だけでも次にご紹介させていただきます。

「YOU!」五十嵐貴久 「正しい魔法のつくりかた」アソナ・デイル 「駅弁読本」上杉剛嗣
「アハメドくんのいのちのリレー」鎌田實 「上野彰義隊と箱館戦争史」菊地明
「潮風に流れる歌」関口尚 「仏像に恋して」真船きょうこ 「小暮写真館」宮部みゆき
「先生、巨大コウモリが廊下を飛んでいます！」(シリーズ)小林朋道 「麒麟の翼」東野圭吾
「ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団」J.K.ローリング 「ヒトラーの特攻隊」三浦耕喜
「ジェノサイド」高野和明 「心を整える。」長谷部誠 「はじめてのかり」オノ・ウツグケ
「榎本武揚シベリア日記」榎本武揚 「都会(まち)のトム&ソーヤ」(シリーズ)はやみねかおる
「カッコウの卵は誰のもの」東野圭吾 「背信の科学者たち」ウィリアム・ブロード/ニコラス・ウエイド
「大槻教授の最終抗議」大槻義彦 「魔女とふしぎな指輪」ルース・チュウ 「告白」湊かなえ
「悪魔に仕える牧師」リチャード・ドーキンス 「貧困なる精神 24 集」本多勝一 「舞姫」森鷗外
「ベルリン陥落 1945」アントニー・ビーヴァー 「QED伊勢の曙光」高田崇史 「冥談」京極夏彦
「偉大なる、しゅららぼん」万城目学 「日本中枢の崩壊」古賀茂明 「なずな」堀江敏幸
「殺人を呼んだ本」赤川次郎 「蒼穹の昴」浅田次郎 「真夏の方程式」東野圭吾
「死者の学園祭」赤川次郎 「東京百年散歩」田山花袋 「ストライプ」デヴィッド・シャノン
「春を恨んだりはいしない」池澤夏樹 「1Q84」(シリーズ)村上春樹 「ピエタ」大島真寿美
「チベット滞在記」多田等観 「阪急電車」有川浩 「月と六ペンス」サマセット・モーム
「物語幕末を生きた女 101 人」『歴史読本』編集 「美空ひばり公式完全データブック」
「日本人て、なんですか？」竹田恒泰/呉善花 「オリガ・モリソヴナの反語法」米原万里
「夜の果てまで」盛田隆二 「洪思翊中將の処刑」山本七平 「刑事魂」松浪和夫
「赤塚不二夫 120%」赤塚不二夫 「沖縄戦とアイヌ兵士」橋本進 「紅の袖」諸田玲子
「鷗外の恋 舞姫エリスの真実」六草いちか 「クリスマスあったかスープ」野中稔
「デタラメ健康科学」ヘン・ゴールドエイカー 「天正血戦譜」(上下)伊藤浩士
「諸子百家」貝塚茂樹 「昭和二十年夏、女たちの戦争」梯久美子 「パーティ」山田悠介
「ある小さなスズメの記録」クレア・キップス 「デュラララ!!」成田良悟 「横道世之介」吉田修一
「秘録少年農兵隊」小野寺永幸 「親力」で決まる!」親野智可等 「八朔の雪」高田郁
「ひるもよるも名探偵」杉山亮 「冢タ・セクスアリス」森鷗外 「舟を編む」三浦しをん
「死に神のサイン」日本児童文学者協会 「星守る犬」村上たかし 「彼岸過迄」夏目漱石
「女の子はサンタクロースになれないの?」エルフィー・ドネリ 「うちのあかちゃんトンパちゃん」クリスティーナ・ロウ
雑誌：図書、天文ガイド、ROCKIN ON JAPAN、短歌、Newton

お読みにになりたい本が見あたらない時は、どうぞカウンターへお申し出ください

中央図書館開館5周年記念講演 開催報告

平成 24 年 1 月 15 日(日) 写真家の故星野道夫氏の夫人・星野直子氏をお迎えし、講演会を開催いたしました。小学生から 70 代の方まで多くの方にお集まりいただき、大盛況となりました。

スライド写真を一枚ずつ丁寧にを見せていただきながら、星野道夫氏との思い出や撮影のエピソードをお話いただき、さらにエッセイの朗読を挟みながら進められました。

アラスカの美しい写真と直子氏の優しい声によって、まるでアラスカに来てしまったかのような錯覚に陥った方も少なくなかったことでしょう。

アラスカに流れる雄大な時間や星野道夫氏の想いが感じられ、参加者の方々と豊かな時間を共有することができました。

これをきっかけに、星野道夫氏の作品世界をより深く味わっていただくことを心から願っています。

『鳩ヶ谷図書館 改修工事に伴う休館について』

期間:平成24年4月2日(月)～6月末(予定)

この期間は鳩ヶ谷図書館の規模拡張を目的とした改修工事のため休館いたします。

従来の3・4階部分を含め、1・2階(旧保健センター)を図書館に改修し、児童コーナーや学習席などを拡充いたします。

休館中、鳩ヶ谷図書館では本の返却にはブックポストがご利用いただけますが、予約資料の受け取りおよび一部の資料(市外借用本、CD・DVDなどの視聴覚資料)の返却ができなくなります。開館中の市内各図書館のご利用をお願いいたします。

詳しくは図書館のホームページおよび市内各図書館の掲示等でご確認ください。

【 鳩ヶ谷図書館改修後の館内配置(予定) 】

- 1階 児童図書コーナー
- 2階 学習席および閲覧コーナー
- 3階 一般図書、視聴覚資料、郷土資料コーナーおよび雑誌コーナー
- 4階 ボランティア研修室、閉架書庫



里文庫は5月31日(木)をもちまして廃止いたします。長い間、ご利用ありがとうございました。廃止後は、鳩ヶ谷図書館(4～6月は工事休館)・南鳩ヶ谷文庫などをご利用ください。